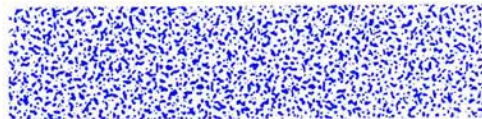


# ひびぎ

No. 5

ドラム缶工業会会報

## ドラム缶の平成4年度出荷実績と 平成5年度需要見通しについて



### ◇平成4年度出荷実績—全体として約5%の減に

このたびドラム缶工業会としての平成4年度の出荷実績及びペール缶の出荷実績がまとまりましたので皆さんにお知らせいたします。

ドラム缶工業会としての全出荷量は、トン数にして348千トンと、需要業界の低迷を反映して前年度比4.9%の減少となりました。これを本数比で見ますと、単重の小さい缶の減少幅が比較的小さかったこともあって、41,099千本と前年度比2.6%の減にとどまりました。この数量は、トン数・本数いずれで見ても、平成2年度をピークとして2年連続して減少し、3年前のレベルに戻ったことを示しています。

缶種別・用途別出荷実績は表-1のとおりですが、その特徴をあげれば次のとおりです。

(1) 缶種別に見ると、ペール缶が前年度比▲1.2%、中小型缶が▲2.5%とともに微減であったのに対し、200ℓ缶が▲5.2%と大きく減少し、全体の足を引っ張った形となっています。また、ウエイトは小さいものの、ステンレス缶が前年度より増加しているのが目をひきます。

(2) 用途別に見ると、最大の需要先である化学向けが前年比▲2.8%であったのに対し、石油▲6.9%、塗料▲9.3%と両用途向けが大きく落ち込みました。この結果、従来からじりじりと上昇してきていました化学向けのウエイトは、平成4年度に初めて70%の大台に乗るに至りました。

### ◇平成5年度需要見通し—3年連続の減少か

また、ドラム缶工業会では平成5年度の需要見通しも作成いたしました。作成するにあたっての基本的考え方は概ね次のとおりであります。

(1) 200ℓ缶については、上期は引き続き需要は低迷する

が下期にはわずかながら回復し、結果的に年度を通して微減となる。

(2) ペール缶及び中小型缶については前年度のようなペースは望めず5%前後の減となる。

(3) 亜鉛鉄板缶及びステンレス缶は前年度並みと考える。

この結果は表-2に示すとおりであります。平成5年度は、トン数にして344千トン、前年度比1.3%の減、本数では39,368千本、4.2%の減少となると見通しを立てたところであります。これは3年連続の減少となるわけで、ドラム缶工業会のメンバーには最善の経営努力を迫る厳しいものとなりましたが、これを前提に精一杯の努力を重ねていく覚悟であります。

(表-1)平成4年度缶種別・用途別出荷実績

缶種	トン数 (単位:トン)	用途別					本数 (単位:千本)	前年度比 %
		石油	化学	塗料	食料品	その他		
200ℓ缶	289.004	48.694	212.782	17.518	4.108	5.902	12.156	94.8
ペール缶	42.446	20.316	17.728	2.757		1.645	26.622	98.8
中小型缶	10.159	333	9.724	29		73	1.775	97.5
亜鉛鉄板缶	6.165		5.714	131	30	290	509	89.0
ステンレス缶	785		398	387			37	109.9
合計	348.559	69.343	246.346	20.822	4.138	7.910	41.099	97.4
前年度比%	95.1	93.1	97.2	90.7	66.6	86.1		
構成比%	(100)	19.9	70.7	6.0	1.2	2.2		

(表-2)平成5年度缶種別需要見通し

缶種	トン数 単位:トン	本数 単位:千本	前年度比 %
200ℓ缶	287.200	12.070	99.3
ペール缶	40.050	25.085	94.2
中小型缶	9.950	1.677	94.5
亜鉛鉄板缶	6.110	500	98.2
ステンレス缶	770	36	98.1
合計	344.080	39.368	95.8
前年度比%	98.7		

# 物流問題の背景

## ——ドラム缶の輸送事情について (その2)

先に本誌第4号にて、ドラム缶輸送の現状をご紹介し、関係各位のご理解を頂きますようお願いいたしました。

本号では輸送に関する問題点を集約し、その各々について具体的な対応策を掲げ需要家の皆様方に一歩でもご協力をお願いいたしたく、わかり易く一覧表にまとめてみました。

不合理な輸送を続けることによる輸送コストの上昇は、いずれドラム缶価格に反映せざるを得ず、輸送の合理化はメーカー、ユーザー、共に利害一致する研究課題として当工業会では精力的に推進していきたいと存じます。

ご存じの通り、ドラム缶はリサイクルシステムも整備され、最終的には製鉄原料に還元される等、最も地球に優しい容器であると自負しています。

本件につきましては難しい点多々あるかと存じますが、できる点から少しでも改善して下さいますようお願い申し上げます。

問 題 点	今後、需要家さんと共に検討していきたい方向
<b>輸送ロットについて</b> 1. 納入単位が数十本以下の小ロット輸送の所	<ul style="list-style-type: none"> <li>・納期に余裕をもって発注して頂き、積み合わせ輸送ができないかどうか……。</li> <li>・2～3日分まとめて納入させて頂けないかどうか……。</li> <li>・同一工場に小ロットで1日2回以上の輸送はぜひ1回にまとめて頂きたいものですが……。</li> </ul>
<b>時間指定について</b> 1. 朝一番指定 道路事情の良い早朝走れる点では好ましい指定であるが、荷卸しまで長時間待たされる場合が問題 2. 午後の時間指定	<ul style="list-style-type: none"> <li>・始業後30分以内には荷卸しをさせて頂けるよう話し合いで。</li> <li>・道路事情の悪い日中走行となるので、時刻の指定は原則として避けて頂きたいのですが……。</li> </ul>
<b>荷卸し時の諸問題</b> 1. 構内の数カ所に分散荷卸しする所 2. 荷卸し場所から離れたドラム置場まで運転手が転がしていき積みあげる	<ul style="list-style-type: none"> <li>・その都度ナワ掛けをし直して配送していますが、極力荷降し箇所を少なくできるよう話し合いを……。</li> <li>・非常に時間が掛かります。通路が狭くトラックが入れない等の事情によるものと思いますが、これもケースバイケースの話し合いでよりよい方向を目指したいと思います。</li> </ul>



## 生産・出荷ともに 8万3千トンを下回る

平成4年度・第4四半期（平成5年1～3月度）のドラム缶生産は、8万2千832トン、前年同期比7.8%減となり、出荷も8万2千742トン、同比8.0%減となったが、第4四半期（1～3月度）で、生産・出荷とも8万3千トンを下回ったのは昭和62年度以来のことであるが、4年度は各四半期とも前年同期より減少した。

今期の出荷本数を、缶種別・用途別にみると表1に示す通りである。

まず、200ℓ缶は、前年同期比8.1%減の2,894千本となり、ペール缶は、同比2.5%減の6,423千本であった。また、100ℓ～20ℓ缶、アス缶型及びその他容量缶のいわゆる中小型缶は、缶種によって増減があり、跛行性がみられる。

なお、200ℓ缶出荷のうち、間接輸出は355千本（構成比12.3%）、多重巻缶は1,335千本（構成比46.1%）で、何れも前年同期の実績を下回った。

# DATA FILE

表一 平成5年（1～3月度）ドラム缶・缶種別・用途別出荷本数

単位：千本

用途		石油	化学	塗料	食料品	その他	合計	前年同期比
缶種								
200ℓ	Q缶	483	2,142	170	46	53	2,894	91.9%
ペール		3,282	2,598	358		185	6,423	97.5
100ℓ	Q缶	4	42	微			46	103.6
50ℓ	Q缶	微	47	微			47	79.4
20ℓ	Q缶	2	132				134	127.1
アス缶型		2	3				5	71.3
その他容量缶		2	209			2	213	100.3
垂鉄板鉛缶	200ℓ		29	1	微	3	33	56.4
	その他		81				81	91.2
	小計		110	1	微	3	114	77.4
ステン缶	200ℓ		3	4			7	114.1
	その他		3				3	133.2
	小計		6	4			10	119.6
合計		3,775	5,289	533	46	243	9,886	95.8
構成比		20.0	70.7	5.8	1.4	2.1	100	—

(注) 構成比はドラム缶の出荷トン数の構成比。



▼「エコマーク」というのをご存知だろうか？ そう、環境保護に配慮した地球に優しい製品のみにつけることを許されている、両手で地球を抱きしめているあのマークだ。ビールやジュースの缶にはこのマークが付いていて、空缶のリサイクル性を誇らしげにPRして

いる。▼ドラム缶は、洗滌して繰り返し使用され、使用に耐えられなくなれば鉄スクラップとして再資源化される、いわばリサイクル商品の優等生である。しかしながら、ドラム缶にはこのエコマークの表示がまだ認められていない。内容物

に関するマークと誤解されるからである。▼どんな内容物にも対応でき、何度も繰り返し使用されるドラム缶よりも、一回限りの使い捨てビール缶の方が環境に優しいことを堂々とアピールできるこの矛盾！

▼それ自体は優れた容器であるにもかかわらず、一部の心ない取扱いのためにまるで環境汚染の元凶のように扱われているドラム缶。その名誉回復はいつたいつのことになるのだろうか。





株式会社前田製作所

当社は、昭和21年個人創業、昭和30年株式会社前田製作所として法人組織に移行した47年の歴史をもつ容器ならびに容器関連事業を営む会社であります。

現在、主製品は20ℓの金属およびプラスチックペールであります。金属ペールは昭和41年我が国で最初に全自動製造ラインを設置、当時渴望されていた省力化

と物流の合理化に大きく貢献し時代の脚光を浴びました。

また、プラスチックペールは全体的な原材料の変遷・多様化の流れのなか昭和62年から取り組んでおります。そのほか、当社はエンジニアリング部門において製缶、充填、搬送、積載等の設備を独自に開発製造し、国内はもとより旧ソ連、中国、イラン、台湾等に多数供給し、広い視野に立っての技術向上と業界の発展につとめてまいりました。なお、今後ともお得意様のご要望に応じ、積極的な経営を展開して行く所存でございます。



森島金属工業株式会社

当社は中小型缶専門メーカーとして、皆様のご愛顧を得てまいりましたが、平成元年には念願の本社工場一体化の実現に向かい、佐倉第三工業団地に着工し、平成2年初めより操業いたしております。

技術的には多品種の中でもオートメ化を計りながら、少数ロットにも対応すべき手動ラインも設備し、ユーザーのニーズに少しでも応えるよう努力しております。特にステンレス缶については、高品質を要求され20ℓ～150ℓの範囲で生産体制を取り、各分野に信頼を得て色々と幅広く利用されております。容器も国際化され危険物輸

出容器として50%以上を超える製品を各分野のユーザーに納入し、対応しております。お蔭様で平成3年には創業50周年を迎え、今後も、明日への飛躍、大きな信頼をモットーに中小型缶専門メーカーとして皆様のお役に立つ努力をしてまいります。



株式会社山本工作所

当社は昭和21年創業以来47年間、ドラム缶・集塵機・チューブラコンベヤの自社製品を始め、各鉄鋼大手企業における常例・保全作業、さらには九州ホイール工業(株)における自動車用小型ホイールの生産など、幅広い分野で生産活動を展開し、九州における地場産業として確固たる地位を確立しております。

ドラム缶については昭和24年に生産開始、昭和62年5月、本社・工場移転とともに最新鋭の機械を導入し、10ℓから180ℓまでの中小型缶から200ℓ缶に至るまで、特殊缶を含む各種仕様ご注文にお応えし、石油・化学・塗料・食品などの各分野で広くご愛用いただいております。「人と技術で未来を拓く山本工作所」をモットーに、より一層の飛躍を続けます。

## ドラム缶工業会

東京都中央区日本橋茅場町3-2-10

(鉄鋼会館3階)

TEL 03-3669-5141 FAX 03-3669-2969

ADK 秋田ドラム工業株式会社  
秋田市土崎港北6-2-22 ☎ 0188-45-1105

O.S.K. 株式会社大阪製罐所  
大阪市此花区島屋2-11-63 ☎ 06-466-4601

川鉄コンテナ株式会社  
大阪市北区堂島浜2-1-29 ☎ 06-344-9711

協和容器株式会社  
新潟市下木戸2-4-20 ☎ 025-274-0371

鋼管ドラム株式会社  
東京都中央区銀座8-11-11 ☎ 03-3574-0711

斎藤ドラム缶工業株式会社  
横浜市鶴見区生麦3-15-14 ☎ 045-521-3881

山陽ドラム缶工業株式会社  
岡山県倉敷市中島1230 ☎ 0864-65-3680

新邦工業株式会社  
東京都千代田区神田佐久間町3-27-3 ☎ 03-3661-5285

大同鉄器株式会社  
尼崎市杭瀬南新町3-2-21 ☎ 06-488-2468

株式会社東京ドラム罐製作所  
東京都葛飾区東四ツ木2-23-16 ☎ 03-3695-8511

東邦シートフレーム株式会社  
東京都中央区日本橋3-12-2 ☎ 03-3274-6212

株式会社長尾製缶所  
和歌山県有田郡吉備町野田144 ☎ 0737-52-25\*\*

日鐵ドラム株式会社  
東京都中央区銀座1-7-10 ☎ 03-3562-0251

株式会社前田製作所  
東京都港区新橋1-5-5 ☎ 03-3573-7101

森島金属工業株式会社  
千葉県佐倉市大作2-5-5 ☎ 043-498-3551

株式会社山本工作所  
北九州市八幡東区大字枝光1950-10 ☎ 093-681-2431

株式会社ユニコン  
大阪府高石市高砂2-7 ☎ 0722-68-0515

ひびき No.5 (平成5年6月26日発行)

発行人 ドラム缶工業会  
専務理事 柴野 正裕

本誌は再生紙を使用しています。